

続・保育の中の小さなこと大切なこと ⑥ 守 永 英子

毎年十二月にはいると、私どもの園では、おもちつきをする。

前日から、庭に、かまどを築いたり、もち米を洗ったりなど、準備が始まるが、子どもたちが参加するのは、当日、おもちをつくことと、お供えを作ることである。

子どもたちは、勇ましく、鉢巻きを締め、年少組は、お相撲さんと一緒に、年長組は、子ども用の小さい杵で、ひとりずつく。

そして、つきたてのおもちを、あんと、黄な粉と、甘辛の、三種類の味をつけて、おべんとうの代りにし、お供えを、家へのおみやげにする。

昼食のおもちは、年少組から、順番に配られるので、年長組は、かなり、おなががすくまで、待たなければならぬ。空のおべんとう箱に、三種類のおもちを、二つずつ配って、

「いただきます」をした頃には、いつもの、おべんとうの時刻

を、余程、過ぎていた。

五歳児のクラスだけあって、おながが空いた子どもたちの食欲は、驚くほど旺盛で、「お代りをちょうだい」の声が、あちらこちらから掛かる。

全部きれいに食べてしまい、追加を希望する人。あなが嫌いだからと残して、黄な粉と甘辛だけ欲しいがる人。甘辛だけを、何度も、お代りする人。いろいろな希望にこたえて、お代りの世話が忙しい。

中には、おもちが、好きではないらしく、初めに配られた分だけでも、残ってしまう子どももあるが、大勢で食べる味は、格別らしく、大抵の子どもが、二度、三度と、お代りをする。

忙しく、お代りを配っている私に、Hが声をかけた。「ほくも、お代りちょうだい。おしょうゆの」

入れようと思って、見ると、Hのおべんとう箱には、まだ、

三種類のおもちが、一つずつ残っているではないか。

「それ、食べられたら、また、あげましょうね」という私に、思いがけない、Hの答えが、返ってきた。

「これ、だめなの。ママに、おみやげなんだから。」「持って帰ってあげる。」「って、約束したの」

私は、はたと困った。毎年、おべんとうのときのおもちには、幼稚園で食べるだけ、家に持って帰るのは、お供え、ということになっている。

Hの希望に添うことは、易しいが、お代りを待っている、Kの視線を感じて、私は、迷った。Hの希望を認めれば、Kを初めとして、他の子どもたちも、「おみやげに、持って帰りたい」と言い出す可能性は、充分にあった。そして、皆が、Hと同じように、持って帰れば、全体の予定が、狂ってしまう。このクラスだけが、勝手に、全体の計画を、狂わせることは、はばかられた。

「あら、困ったわ。このおもちは、おみやげの分がないのよ。お家へのおみやげは、みんなが作った、お供えなの」

他の子どもに、追加のおもちを配りながら、こう言って、Hの反応を待った。待ちながら、私の心は迷い、自分の気持ちの方向が、定まらないことに、焦りを感じた。

Hは、おみやげにしたい気持が、強いらしく、おべんとう箱のおもちに、手をつける様子もなく、もう、「お代りを、

ちょうだい」とも、言わなかった。

自分が食べたい気持を、我慢してまで、母親に、おみやげにしたい、というHの、強い気持を感じて、私は、子どもたちに、お代りを配りながら、Hのおべんとう箱にも、黙って、そっと、甘辛のおもちを一つ、入れてあげた。

Hは、はっと、意外そうに、私を見上げて、何か言いたげな様子をしたが、何も言わずに、おいしそうに、食べ、私も、その様子に、ほっとしたのである。

迷いつつ、選んだ、自分の動きであった。が、本当に、これで、よかったのだろうか。

お代りの、たった一つのおもちには、恐らく、彼の食欲を満たすには、ほど遠いものに違いない。しかし、満腹してしまつては、食べたい気持を我慢しても、持って帰りたいという、「母親への思い」が、生きてこないように思われる。

では、たった一つの、小さなおもちは、どういう意味をもっていたのだろうか。自分の心に問うて、思い当った。

それは、彼の優しさを、肯定している、自分の気持の「証」だったに違いない、と思う。

生活の中の、ほんの小さな出来事である。が、その中で、自分の動きの意味を、問うてみることは、大変、興味深いものである。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)